

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イタリア語における強調表現
Author(s)	古浦, 敏生
Citation	ニダバ , 3 : 25 - 27
Issue Date	1974-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044704
Right	
Relation	



イタリア語における強調表現

古 浦 敏 生

§ 1 はじめに

文中の1語(或は、語群)の意義を強調する際、如何なる手段が用いられるのか? その方法は、それぞれの言語によって異なるが、一般には、語順の変更、反復、強意語の使用等の手段が用いられる。

イタリア語における「強調」に関する研究としては、Gossen, C.Th. 「現代イタリア語における統語論的・文体論的強調に関する研究」1954^(注1) という論文があるだけで、筆者が調べた限りでは、日本語で書かれたイタリア語文法書には勿論、イタリア語で書かれたイタリア語文法書においても、この「強調」に関して1章をさいている文法書は見あたらない。

そこで、筆者は、種々のイタリア語文法書の中で部分的に「強調」に触れている箇所を抜き出し、さらに、現代イタリア語の用例だけでなく、古代イタリア語(主として、ダンテ「神曲」、ボッカチオ「デカメロン」)の用例をも加えて、イタリア語における強調表現全体を総合的にまとめてみたいと思うのである。

§ 2 語順変更による強調

形容詞は、それが修飾する名詞よりも(音節的に)長い場合には名詞の後に置かれるのが常であるが、この際、形容詞が名詞の前に置かれるとその意味は強まるのである。^(注3) 例えば、un bellissimo giardino 「非常に美しい庭」は、un giardin bellissimo よりも意味が強い。

また、平叙文においては、主語が述語動詞に先行するのが通則であるが、これを倒置させて主語を後に置くとその意味が強まる。^(注4) 例えば、Io andrò a chiamare il dottore. 「私は 医者を呼びに行くであろう」に対して、Andrò io a chiamare il dottore. は、「私 が(自分で) 医者を呼びに行くであろう」の意となる。

§ 3 付加または反復による強調

例えば、Non voglio leggere questo libro. 「私はこの本を読みたくない」において、下線部を強調したい場合、これを文頭に置き、さらに、それを受ける代名詞を付加する方法をとる。^(注5) 即ち、Questo libro non lo voglio leggere. 「この本を、私は、それを読みたくない」となる。

また、*casa*「家」に *-etta* という指小辞が付いた *casetta*「小さな家」という語に、さらに、*piccolo*「小さい」という形容詞を付加して「家の狭さ」を強調する方法もある。*piccola casetta* (デカメロンⅤ, 9, 18)。 *poderetto piccolo*「小さな所有地、猫の額ほどの土地」(デカメロンⅤ, 9, 7)も同様。

また、例えば *pensare*「考える」という動詞には、一般に、再帰代名詞は付かないのであるが、敢えて付加することによってその意味を強める場合がある。例えば、*io mi pensai che, qual voi siete, tal gente venisse*「私は、汝等のような人々がやって来ることをまさに想像していた」(神曲 Inf. XVI, 56-57)においては、強調のための再帰代名詞 *mi* が付加されている。(注6)

反復による強調の例としては、*piano*「ゆっくりと」という副詞を二つ重ねて *piano piano*「ごくゆっくりと」。さらに洗練された文体では、同じ語を繰り返さずに、二つの同義語を併置してその概念を浮上らせる方法が用いられる。例えば、形容詞 *pieno*「満ちた」と形容詞 *zeppo*「満員の」とを並べて *pieno zeppo*「超満員の」。(注7)

§4 省略による強調

動詞不定法を主語として用いる場合には、一般に、単数男性定冠詞 (*il, lo, l'*) を付加するのであるが、時には、この定冠詞を省略し、その意味を強める。^{注8} 例えば、*Errare è umano: perdonare è divino*。「過ちを犯すのは人の、許すのは神の為せる業である」における不定法 (*errare, perdonare*) は、無冠詞であって、その意味を強めている。この種の用法は、格言に多く見られる。

また、動詞の不定法が特定の主語に従属しないまま独立して用いられて、強調構文を作ることがある。^{注9} 例えば、*Dire a me una cosa simile ?!*「私にそんなことを云うのかい」においては、*tu dici*「汝は云う」のような動詞変化をしないうで、独立した不定法が文頭に現れている。これは、特定の主語 (*tu*「汝」、等) を省略することによって、より生き生きとした表現になっている。

§5 おわりに

以上、語順変更、付加または反復、省略という三点から、イタリア語における強調表現を概観したのであるが、細かく調べれば、まだ十分に云い難い。ここで少し補足しておこう。例えば、「貴方に」という場合、*Le* よりも *a Lei* の方が強い。これは、前置詞 *a* の付加 (代名詞も、前置詞の後なので強調形となっているけれども) の現象と考えれば、§3に入れられなくもない。さらに、強調したい要素を強く発音する現象もある。例えば、*cantanti*「歌手達」が男性の

の場合には *i cantanti*、女性の場合は *Le cantanti* である。この際、定冠詞 *i*、*Le* は強く発音されるのである。これも、強アクセントの付加と考えれば、広い意味で § 3 に含まれる。

最後に、前述の 3 つのパターンのいずれにも当てはめがたい例を挙げておこう。例えば、*grande* 「大きい」という形容詞は、次の語が子音で始まる場合には、語末音節を切断するのがしばしばである。即ち、*un gran pittore* 「偉大な画家」。この際、切断しないままの形を用いて *un grande pittore* とすれば、その「偉大さ」は増すのである。(注10)

-
- (注1) これは、ベルリンのドイツ科学アカデミー・ロマンス語研究所発行の論文で、残念ながら、筆者未見。
- (注2) Hall, Jr. R.A. : *Bibliografia essenziale della linguistica italiana e romanza*, 1973, Firenze, p.74
参照
- (注3) ヴァカーリ「伊語会話文典」1957, p.395.
- (注4) ヴァカーリ、上掲書、p.282.
- (注5) Migliorini, B. : *La lingua nazionale*, 1963, Firenze, p.186.
- (注6) Siebzechner-Vivanti, G. : *Dizionario della Divina Commedia*, 1954, Firenze, p.394.
- (注7) von Wartburg, W. : *Einführung in Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft*, 1962, Tübingen, p.86.
- (注8) ヴァカーリ、上掲書、p.529.
- (注9) 坂本鉄男「イタリア語の入門」白木社、1969、p.182-183.
- (注10) Battaglia, S. & Pernicone, V. : *La grammatica italiana*, 1957, Torino, p.158.